



沖縄・離島の部活動等派遣費問題白書発行記念シンポジウム

～子どもの体験保障の観点から派遣費問題を考える～

実施報告書

開催日時：2023年2月18日（土）13:30～16:00

実施場所：なは市民協働プラザ 会議室1

シンポジウム登壇者数：12名

参加者数：18名

主 催：公益財団法人みらいファンド沖縄

プログラム：

13:40～ 分科会① 沖縄・離島の子とも派遣基金事業を振りかえる

14:30～ 分科会② 子ども体験保障の観点から今後の方向性を考える

15:10～ 分科会③ 派遣費問題の解決に向けて

報告書作成
公益財団法人みらいファンド沖縄

分科会①「沖縄・離島の子ども派遣基金事業を振りかえる」

登壇者：

嘉数 菜利子（公益財団法人みらいファンド沖縄 / 沖縄・離島の子ども派遣基金事業プログラムオフィサー）

沖山 亜紀子 氏（NPO 法人豊見城市体育協会）

喜納 正雄 氏（株式会社ハブクリエイト 代表取締役）

石川 勇作 氏（石垣市議会議員）

溝井 洋輔 氏（沖縄タイムス社 記者）

上里 一将 氏（元 FC 琉球、宮古島出身者初の J リーガー）

●嘉数より報告

- ・ 2020~2022 年度の 3 年間、休眠預金事業を活用
- ・ 派遣のパターンは、①離島→本島②本島→本土

- ・ 3 つの実行団体：ハブクリエイト（石垣）
離島枠、文系も対象サッカー協会（障がい者スポーツも含める）豊見城体育協会（地域枠）

- ・ 事業原資は 休眠預金 + 基金
- ・ 3 年間で 196 件 1,561 人の派遣を実施（36,429,408 円）

- ・ 円卓会議+4 つの調査
- ・ 41 市の材
- ・ 強豪校
- ・ 各スポーツ協会（調査中）
- ・ 障がいスポーツ（調査中）

- ・ 見えてきた 7 つの課題

1. 旅費格差
2. 競技種目による格差
3. 強化活動に参加できない

4. 成長の機会格差

5. 障がいを持つ子どもの派遣
6. 子どもの体験の質にかかわる帯同者
7. 旅行手配

- ・ 家計負担 7 割→3 割に減らせた、これを継続したい
- ・ 価値観を変えていく必要がある家計負担が当たり前と考えられている

- ・ まとめ
→白書を通じて現状を共有
→今後について一緒に考えたい

●沖山氏

- ・ 行政の立場から、市在住の小中学生（選手のみ）対象に 2 回まで補助を実施した
- ・ 部活動派遣の帯同（指導者、保護者等）に注目した
- ・ →子ども達だけで派遣に行くのは難しい
- ・ →保護者と行くことで、体験の質が高く保障され、かつ安心できる

●喜納氏

- ・ 離島（石垣、竹富）で実施
- ・ 県大会に参加で発生、毎回 3~4 万円
- ・ 予選で発生、本島で行われる、初戦から
- ・ 孫離島、竹富などはより負担大
- ・ 石垣（前泊）→本島→（後泊）石垣
- ・ 選手のコンディション、パフォーマンスにも影響する（不利な側面）
- ・ 台風で旅程に影響が出る
- ・ かたや県大会が石垣で行われる場合→他市町村かの団体からブーイング
- ・ 文科系
- ・ 芸能- 全国大会 700 万円超え
→着付け・サポートの人
→朝 2 時から着付け
- ・ マーチングバンド- 200 万円
→保護者は年中資金造成

●上里氏

- ・ 小学生の時、県選抜では毎週末、練習が本島で行われる
- ・ 両親に経済的負担をかけたくないため、嘘をついて足が痛いなど、参加できない理由を作った。しかし毎週参加しないと選抜されない

- ・ 小学生の時、九州大会もあったが、宮古島からの旅費が出せないことで参加できないメンバーもいた
- ・ プロスポーツも遠征費の問題がある

●石川氏

- ・ 離島と本島の派遣は別問題と考えている
- ・ 4000 万（県内）400 万（県外）
- ・ 予選だから参加人数も多い
- ・ 県大会の派遣は、当初 2,000 件
- ・ 新空港ができてから 4,000 件→全国に出るの機会も増えた
- ・ 旅費がブレーキになっている
- ・ 石垣島出身のプロ選手も増えた

●溝井氏

- ・ 子どもたちのスポーツ取り上げている
- ・ 優勝者は記事になるが派遣費は大丈夫かなと心配になる
- ・ 身近にある実態、課題であるが仕組みとして支えられていない
- ・ 今回、課題や支援事業が可視化された
- ・ 今後どう解決していくか



分科会②「子どもの体験保障の観点から今後の方向性を考える」

登壇者：

平良 斗星（公益財団法人みらいファンド沖縄 副代表理事 / 沖縄・離島の子ども派遣基金事業プログラムオフィサー）

幸地（落合）千華 氏（一般社団法人 CoAr 代表理事 / ケイスリー株式会社）

横江 崇 氏（弁護士 美ら島法律事務所）

下地 麗子 氏（琉球放送株式会社 テレビ本部 報道制作局報道制作部 スポーツキャスター）

●幸地氏

- ・ 評価アドバイザー
- ・ 事業がちゃんと実施されているか
- ・ どこに課題があって成果は？
- ・ この事業の評価は？（3年見てきて）
→白書に提案をまとめられた

●横江氏

- ・ 子どもの権利や人権が専門
- ・ 成長・発達・能力が十分に発揮させる状況が核
- ・ 経済的な理由によって能力が発揮できない状況がある。機会や選択肢の保障…
- ・ 能力に加えて地理的負担(二重の負担になっている)
- ・ 社会や地域で支えていく(民間で支える部分と公的に支える部分)
- ・ 部活動などの地域移行

●下地氏

- ・ メディアは勝利チームの取材がメイン(光があたる部分)
- ・ 離島から全国に行く！＝注目度アップでも、美談の裏の問題の派遣費などはあまり報道できてない
- ・ 部活動=贅沢品、親の経済レベルに合わせて頑張れば良い、自己責任論で語られ

る

- ・ 子どもの体験保障という観点で議論を深めていきたい
- ・ スポンサーの「ボール贈呈」は 強豪チームだけ→本当に困っている離島にこそ必要
- ・ 企業のイメージ UP のためにもそういった課題とマッチングできれば
- ・ 「用具が買えない問題もある」
- ・ 今の貧困は、①体験、②発達の機会が奪われることが問題

【子どもの体験保障について】

●幸地氏

- ・ 部活動より「貧困問題」をどうにかしろ！という意見もあることが印象的だった
- ・ 部活動は公教育の中で行われている。
- ・ 本当は参加したいのに「どうせ楽しくない」と言う(すっぱいブドウ論)
→子ども達がそう思うのを防ぐ
- ・ 子ども達が何かしたいと思ったときに、繋げられるようにしていきたい。

●横江氏

- ・ 学校と地域との間にはまだハードル(壁)がある。地域移行の流れで、学校もより

開いていければ

- ・ 学校や生徒と支える側（地域）との接点
- ・ 貧困の定義のアップデートが必要！
- ・ 昔)「貧困」=食べられない
- ・ 今)「貧困」=食べられるけど、発達の機会が失われる。体験の保障がされていない

【メディアはどう取り上げていくか】

●下地氏

- ・ 豊見城体育協会からの派遣メンバーへ後追いの取材で「高校になってもサッカーしたい！」と発言があった。中学生が自分の意志で自分の将来の選択を選んで発言出来た事を取り上げることがで

きた。こういう声をもっと拾っていききたい

- ・ 地域移行について。先生たちの異動があっても、離島は3年で異動で技術やスキルがあっても顧問の先生と地域の連携が続かない。地域移行に関する予算は離島などに手厚く配分すべき

●幸地氏

- ・ 「部活動の派遣費問題」という言葉以上に大きい問題を扱っている事を知って欲しい。勝利を求めているわけではなくて、地域で子供たちの体験活動を応援している



分科会③「派遣費問題の解決に向けて」

登壇者：

小阪 亘（公益財団法人みらいファンド沖縄 代表）

喜納 正雄 氏（株式会社ハブクリエイト 代表取締役）

岡田 太造 氏（一般財団法人 日本民間公益活動連携機構 専務理事）

溝井 洋輔 氏（沖縄タイムス社 記者）

●小阪

- ・ 身近な問題だけど解決に広がらない現状を端々で感じた。派遣費だけの問題で

はない事をこれまでの分科会でも報告があったかと思う。今回はこの3年間で不可星して振り返る機会となった

- ・ 派遣費問題は費用の補助だけで終わる問題ではないので、多くの団体と協力して解決を目指していきたい
 - ・ 7つの展開案として
1. 公益財団であるみらいファンド沖縄を通すと税制優遇が受けられる
→「個別大会基金」のブラッシュアップができる
 2. 困窮世帯が応募できる給付型奨学金型の議論
 3. 沖縄県に対する離島施策の充実とふるさと納税活用への提言
 4. メディアと協働した啓発活動（親自身の認識）
 5. 子どもの権利保障を目的とした運動への参画
 6. 各競技団体と地域企業をつなぐ基金プロジェクト
 7. 手配の相談や夏場の旅費コストダウンを目指す派遣ワンストップサービス（仮）の実行可能性調査
→「特に2～7について皆さんと連携しながら進めていきたい」

●溝井氏「4.メディアと協働した啓発活動（親自身の認識）」について

- ・ 派遣に関する「あきらめ」などのエピソードを集めて、実態を提示していきたい
→スポーツ欄だけにとどまらず

●喜納氏

- ・ イベントでのブース出展など資金造成の場やノウハウもコロナにより奪われてしまった
- ・ 石垣市青年会議所、商工会などの団体の

協力を得て実行委員会を設置し資金造成の「祭り」を計画、6月に実施
→マーチングやカラーガード部、現代版組踊等の舞台、父母会運営の飲食ブース（10店舗）3000名集客×1500円=売上450万円。6月に実施する事で夏の派遣費予算となる。持続可能にしたい

●岡田氏

- ・ 休眠預金活用事業を全国展開しているが、体験格差をテーマにする所が多い
- ・ 「あきらめない」気持ちを派遣で体験している。派遣したことによって外の世界を見て成長体験を得る。そして地元に戻ってその地域社会を元気にしていく子供を一緒に育てていくという事が大事。その体験格差の解消を目指していく

●平良

- ・ 企業⇔チーム（1対1の関係）属人的で持続が難しい。寄付する側も受ける側ももっと地域の人たちに評価されるべき
- ・ ex)オリカンビールの首里まちづくり基金→使い道を高校生自身がプレゼンして皆で決める

●溝井氏

- ・ 寄付や支え合いが属人的だと、メジャーなスポーツに偏ったり、目立たない種目や人には支援が集まらない。地域や面で捉えて支える必要があるのでは

●我如古氏（来場者：青年会議所）

- ・ 企業、経営者など地域作りを行う有志
- ・ JC 地区大会のフォーラムの一つとして派遣費の課題を取り上げる。その結果を行政などへ課題提起していきたい

●平良

- ・ 「1. 個別大会基金」とは？
→大会別の基金を設けて寄付を募る。旅費をただ預かるのではなくて、公益財団法人に寄付として預かる事で最大 44% の還付があり税制優遇を受けられる。家計負担軽減に繋がる

●溝井氏

- ・ 「2. 困窮世帯が応募できる給付型奨学金型の議論」について
- ・ コロナ禍で親も困窮。それによって大会などの参加を諦めたりするが、その事実を知られたくないという側面もある
- ・ トレゼン問題がやっかい(選抜などに選ばれる前段回なのに負担が多い)

●喜友名氏 (来場者：県議会議員)

- ・ 「3. 沖縄県に対する離島施策の充実とふるさと納税活用への提言」について
- ・ これまでの円卓会議などの内容を基に、県議会で派遣費問題は取り上げてきた
- ・ 子供達の権利保障として教育委員会へ支援の必要性を話した(担当の理解あり)
→宿泊補助の話題になると教育庁では扱いにくい。離島振興の課題というよりは、教育課題(体験保障)としてアプローチしている。トップダウン&ボトムアップで行政も動かしていきたい
- ・ この問題のユニークな点は既に民間が予算を確保しているので仕組みづくりに行政との連携が必要。行政の責任問題

で終わらさない仕組みづくりを!

●岡田氏

- ・ 子供がどう成長してきたかのエピソードが欲しい。何件派遣したではなくて、体験活動を通して成長した人間が地域をどう元気にしていくかストーリーを見せる
 - ・ 休眠預金は行政が手の届かない制度の狭間にある社会課題を解決するためにある。社会課題が認知され仕組み化されるとまたそこから漏れる課題もでてくる。こういう活動は行政に決められた枠ではなく
- ① いくつかのネットワークで行う良さ
 - ② 当事者同士で引っぱっていき良さがあって、民間でやる意義がある。

●喜納氏

- ・ 祭りの場は、子どもの舞台での活躍もある一方で、親の背中を見せる場でもある。皆が主役

●小阪(まとめ)

- ・ 一つのテーマをいろんな人からの視点から深めることが出来た
- ・ 3年区切り、次のスタートが今日の場合もある
- ・ 最終的には全ての体験保障が出来る事を目指し、最初の切りこみとしてこの派遣費問題シンポジウムを捉えたい。



参加者アンケート集計

◆概要

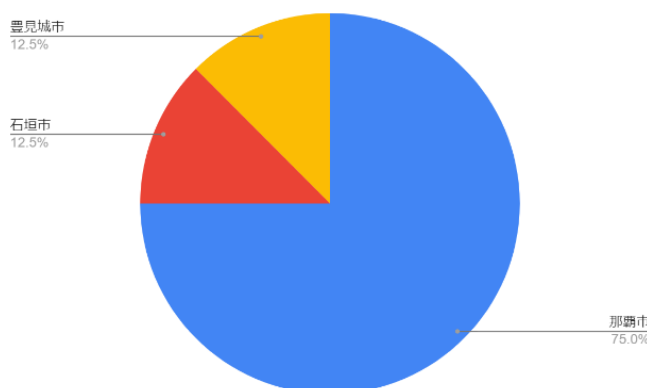
開催日時：2023年2月18日（土）13:30～16:00

実施場所：なは市民協働プラザ 会議室1

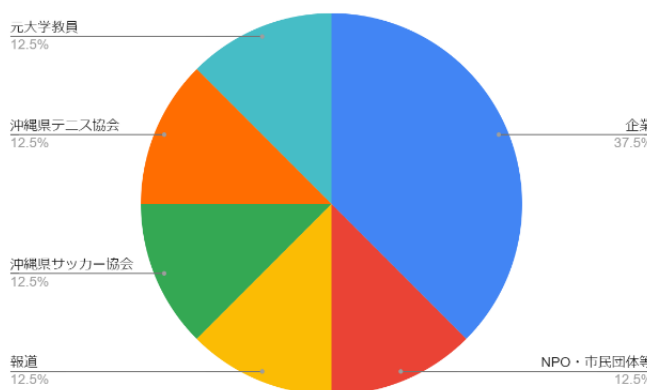
シンポジウム登壇者数：12名

参加者数：18名（アンケート回収9名、回収率50%）

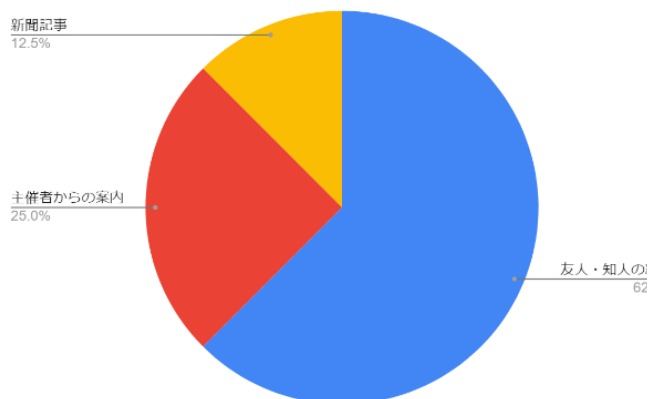
1. どちらから？（市町村）



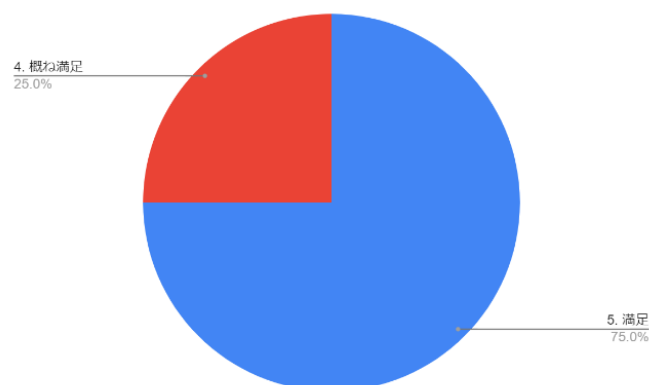
2. 所属



3. どのようにシンポジウムを知ったか



4. 満足度



5. 満足度の理由

（満足）

- ・ 沖縄・離島の部活動等派遣費問題について状況や今後の課題などが良くわかった。
- ・ メディアも入っており、発信できた
- ・ 3年間の活動から得た検証結果をもとに今後の活動に向けての方向性が見えてきたから
- ・ 勉強になった。報告書をもっと掘り下げて勉強します

（概ね満足）

- ・ 限られた時間の中で、3年間を振り返り、上里一将さんが当事者としての意見を述べ、今後の方向性まで示す盛りだくさんの内容だったから現状課題を把握できました
- ・ 部活動に掛かる経費について、考える視野が広がりました

6. シンポジウムで印象に残った事

- ・ 大会開催地が石垣など離島の場合、本島在の団体からブーイングが出るという事。
- ・ 競技の枠をこえて資金造成イベントを行うのは良いアイデアかと思います
- ・ 他団体の生の声
- ・ 横江さんのお話のなかで「これまでの貧困はごはんを食べれないことだったが、今の貧困は子

ども達はごはんは食べれている状態。”体験の格差”が貧困のひとつとなっている」というお言葉が印象に残っています

- ・ 当事者の意見をもっと地道に取り上げて、社会課題として多くの県民に認識してもらう大切さが示されたこと
- ・ 上里さんのエピソード
- ・ 分科会1で出された「7つの課題」が目に見える形で出されたので、今後の活動の方向が見えた
- ・ 「貧困」の定義が変化してきているという事を理解できた
- ・ 休眠預金の活用、企業版ふるさと納税
- ・ 子どもの「文化」「スポーツ」「部活動」等々の体験格差という問題が、よく伝わってくるシンポジウムでした